

監修 大佛次郎 川口松太郎 木村毅

講談社

大衆文学大系

27

角田喜久雄
山手樹一郎
村雨退一郎

大衆文学大系 27 角田喜久雄 山手樹一郎 村雨退二郎 集

昭和四十八年七月二十日 第一刷

著者 角田喜久雄 山手樹一郎 村雨退二郎

装幀者 田中一光

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―十二―二十一 郵便番号 一〇二
電話東京 (〇三) 九四五―一一二 (大代表) 振替東京 三九三〇

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

製本所 大製株式会社

定価 三四〇〇円

©角田喜久雄 山手樹一郎 坂本萬里
落丁本・乱丁本はおとりかえいたしません

目次

角田喜久雄集

妖 棋 伝

五

風雲将棋谷

一九

山手樹一郎集

桃 太 郎 侍

三五

村雨退二郎集

富 士 の 歌

五七

黒潮物語

解説
年譜
題

五
五
五
五

角田喜久雄集

妖 棋 伝

縄 いた ち

一

浅草駒形の裏通り。

ばったりと風の絶えたむし、暑い深夜の街に、あ、お、くさい水藻の香がほんのりと淀んで、大きな暈を冠った銅色の月が唯事ならぬ気配に鈍く光を放って大江戸の中天にかゝっていた。

橋場の寓居へと帰りを急いでいた武尊守人——質素な風体、中肉中背、どちらかと云えば痩せ形の方ではあるが、裸になれば鍛え上げた筋肉が隆々と節をつくつていようといったタイプの好青年。殊に人眼を惹くのはその顔で、時におよんで精悍な光りを放つ切長な眼がなかったら、歌舞伎役者としても間違えられそうな美貌である。

寝鎮まった駒形の裏通り。

鈍い月光にはのかに浮き上がった人家の軒先をすた／＼小急ぎに歩を運んでいた守人は、ふと足を止めて薄闇の彼方をじつと見詰めていたが、何おもったか傍の立樹の蔭へついと身を寄せた。

梅雨あけの——あ、臭い水藻の香を含んだ湿度の高い空気が、じつとして息も詰まりそうに感じられる晩だった。

しんと鎮まりかえった夜気の中に、守人は何を感じたのか、立樹に寄り添ったまゝ息を殺し、眼を凝らして、薄闇の中に何物かを期待するごとく佇んでいた。

と、静寂の底に何かの気配——蹙音らしいものが、二歩か三步、酒にでも酔ったように乱れて聞えた、と思った途端、ふつと聞えずなつて、一分か二分——その中、思い出したようにまた三步か四歩聞えて、聞えたかと思ふと、ふつと杜絶えて、再び一分か二分——それから三度目に、蹙音が——否、黒い影がよろよろと月光の下によろめき出した瞬間、その身体はくた／＼といくつかに折れ曲つてどうと大地へうつ伏せにのめり倒れた。

守人の佇んでいた直ぐ側である。

倒れてうずくまった男は、それぎり身動きもせず、断末魔を訴えるような呻き声が不気味に、途切れ途切れ聞えて来た。

守人は一寸眉を蹙めたが、つか／＼と寄って行つて、「どうなされた？ しつかりなさい。」

と声をかけたが、倒れた男が左手で抑えていた脇腹から夥しく噴き出ている黒いどろ／＼の液体を見て、

——医者も、もう間に合わぬ——と腹の中で呟いた。

黒装束に野駈草鞋、緩んだ覆面の間から現われている苦悶に歪んだ形相も、一癖も二癖もありそうな男だ。

守人は耳へ口を寄せて、

「しつかりなされ。何か云い置く事はないか？ 遺言はありませぬか？」と声をはげませた。

「むむ……」

男は、懸命に、何かいおうとしているのである。

「さア、しつかりして。いう事があれば……」

「むむ、ううう……」

男は、身体を痙攣させた。そして努力して眼を開きかけたが、もう視覚はないのであろう。

「ううう……」

と唇を震わせて、必死の努力で、

「うう……や……」

何かいおうとしているのである。

「え？ 何？」

「ううう……や……ま……」

「や、ま……それから？」

「や、ま……び、こ……」

「や、ま、び、こ……やまびこ。よし、それから？」

「う、う、う……」

「しつかりなされ！」

男は、しかし、全身を激しく痙攣させて、駄目か、と呟いた守人に半身を託したまゝ、がっくりと動かずなってしまうたのだった。

——南無阿弥陀仏。——死骸に目礼して、辻番所へでも届け、てやろうと、呟きながら、立上ろうとした守人の膝から何かころりと転がり落ちた物があった。男が最期まで右手に握んでいたものだ。拾い上げて見ると、一枚の将棋の駒——銀将なのである。

時に享保元年丙申六月二十二日。

七代將軍家継年齒八歳にして薨じ、尾州家を抑えて吉宗紀州家より入って統を継ぎ、その月その日、正徳を享保と改元した記念すべき日であった。

二

血液の臭気が湿度の高い空気の中に溶け込んで、どろんと四辺に立ち籠めた。

生血をしたって蒼蠅の羽音が二つ三つ。

武尊守人は拾ったものを銅色の月光にかざして見て、

「銀将——将棋の駒か……」と苦笑した。

——銀将にやまびこ……やまびこは山彦の意味かも知れないが——考えたって解る筈もない。先ず、番所へ届けて……と思つて歩き出そうとした途端、

「おい！」

と背後で声がした。

ぎょッとして振向いた守人の鼻先に、死骸を間にしてのっそりと突立った人影が一つ。粗い縞物の着流しに大小をだらりとぶつ込んだ恰好は一廉の浪人体だが、黒頭巾の間から覗いている顔の醜悪さ。眼も鼻も、臃みつぶれて区別のつかないほどの物凄く容貌である。それが、にや／＼笑いながら、

「若えの、ちよいとした腕だのう。」

と囁れ声でいって、死骸の方を顎でしゃくった。

守人は薄ら寒い不気味さを全身に感じて、

「いや、身共は唯……」

と、多少狼狽しながら云おうとするのを、相手は手を振って制し、

「見ていたぜ。」

と鼻で笑った。守人はむッとして、

「身共は通りすがりの者だ。これから番所へ届けてつかわそう
と思つて……」

「見ていたぜ。」

相手はじろりと守人の顔へ流し眼をくれて、

「此奴から何か掻払つたようなのう？」

「何ッ！」

「見られて都合は悪かるうが……奪つたものは一体何だ？」

「奪りはせぬ。拾つたのだ。」

「それ〱、その拾つたという代物に一寸用がある。此方へ渡して貰いてえね。」

守人は胸に燃えあがつてくる憤怒を凝つと抑えながら、切口上で、

「欲しければ番所で……兎に角、身共は届けて置こうと思う。」

「まア待て、小僧。」殺氣を含んだ囁れ声だ。

「俺ア、一度貰おうと思つた物ア必ず貰わずに置かねえ性分なんだ。おとなしく、出すものを出しちまえ。」

「身共、一度渡さぬと思つたものは必ず渡さぬ性分だ。断るう。」

「ふムム……味な台詞で来やアがつた。鼻っ張りの強え小僧だのう。」

醜怪な顔を一層醜く引き歪めて苦笑いしながら、

「で、手前、俺の名前を知つてるか？」

「身共、怪物に識合いはない。」

「わッはッは……云つたな、小僧。だが、覚えとけよ、俺の名を、子供の虫封じにや効驗あらたかだと江戸中での噂だ。縄繩……縄いたち。聞いたか、小僧。それが俺の名だ。」

「えッ！」

守人は思はず声を揚げて相手の顔を見直した。

その頃、江戸で、悪鬼の別名のように取沙汰されていた縄いたち。夜の大江戸に通り魔の如く出没して、魔力を持った一条の縄を電光の如く揮つては当るを幸い暴行を働くと恐怖せられていた縄いたち。醜怪な容貌と野獣のような行動と、魔法に近い縄術とを以て縄いたちと呼ばれていた素性不明の男。その男が、今、自分の眼前に立塞がつているのだ。

三

上州も越後寄りの北の奥、坂東太郎の水原近い山峽に藤原とよばれる村落がある。その村端れ、武尊山の山麓に連綿十二代の家系を誇る名家武尊家こそ守人の生れた家である。母を六年前に、父を昨年それぞれ失つて、今では兄弟三人。兄の武人は家を継ぎ、弟の守人は江戸見物を希望する妹を伴つて、仕官の道を求めて遙々江戸へ上つて来たのだつた。

亡き父、武尊右衛門は稀代の天才で、「縄を使って刀槍に勝る」と呼ばれた如く、武尊流縄術こそその独創によつて完成された素晴らしい武術であつたが、彼が門弟をとることをきらつたのと、その技術が習得極めて困難であつたのと二つの理由から、世間には殆んど知られていなかった。兄の武人は武芸を嫌つて孔孟の道に親しむ学者型の男だったが、弟の守人は父の気性と縄術とをそっくり受けついでいるのだつた。

その守人が江戸へ出て真先に聞いた噂——それは縄いたちのことだつた。縄術という珍しい武器。縄を使うというだけで、守人にとっては十分の興味だつた。

——その縄術、武尊流とどれだけ差異があるか？一度出会つて、間がよければ一手合せ、と思つていた矢先。

忽然と、前に立塞がつた怪物が、その、縄いたちであろうとは！

「若えの。」と縄、たちは顎でしゃくりながら、
「俺の名を聞いても、まだ、腰の刀が抜けるかい？ まさか、逃げもなるめえが……」

「考えていたところだ。」

守人は微笑を送りながら、

「世の中は、なか／＼味にできている。会いたい、居所も解らず、と諦めていたに、そっちからわざわざ来てくれて……」

「会いたい？ 俺に？」

「左様、お身に……否、お身の、縄に。」

「縄に？ ……ふん。」

縄、たちは守人の顔をじろ／＼と見詰めながら、

「味な台詞だ、出来るな、一寸は……」

と、右手で自分の剣の柄を叩いて見せて、

「だが、俺の縄は生きている。生きてるんだ。小僧、いゝか！

いゝか、それ行くぞ！」

小刻みにつゝと寄ってくるのを、守人は注意深く観察しながら、

——どう来るかな？ 否、どう来ても——

どう来ても受けるだけなら、と、両足を揃え、左手を束頭へ、右手を内懐へ——武尊流でいう八方立——受けの基本体に、静かに身体を移した。

小刻みに迂り寄って来た縄、たちは、つと足を止めて、眼を見張りながら怪訝そうに相手の構えを注視していたが、急に緊張した面持で、じりつと左足を一步引くと、左右の手を内懐へ入れ、身体を沈めた。

——武尊流でいう飛龍の構えだな。——

守人は右手で内懐の縄の端を掴みながら、氣息をととのえて相手の攻撃を待っていた。

飛龍の構え——縄術の攻撃姿勢としては最も有効なもので、縄が右手から繰出されるか左手から飛出すか不明なところにその構えの眼目があるのである。

縄、たちは、じりつと一步進んで、また、じりつと一步退いた。その瞬間、がッ！ と空気が、つん裂けて、その左袖から流れ出した縄と守人の右手から飛んだ縄とが、中天に白く流星の尾をひいて、びゅんと音して触れたと思うと、一瞬、まるで弾かれたように左右に別れて消えてしまった。

二人は、先刻のまゝの姿体で作った人形のように突立っている。

五六秒——途端、懐から抜いた右手を振って、縄、たちが、「待て、待て。若えの。中休みをしようじゃねえか。」

と、守人を制し、

「武尊流だのう？ なる程、気がついて見りゃア、刀も定法の二尺もの。袖口を一杯に切開いた恰好も文句の無え縄術家だ、八方立の構えから俺の縄を宙で払った縄捌きも相当のものだし、第一、武尊流と来ちゃア珍らしい。お前ぐらい使える奴ア、まア、日本に二人か三人、四人とは居めえと思っていたが、一体、お前は誰様なんだ？」

相手が相手、縄、たちなどとはと綽名のついた無頼漢に、自分の姓名を明かす必要は……とも思ったが、相手の縄術に興味を覚えて、訊ねて見たい気持ちも動いたので、

「武尊流を少しく……姓名は、武尊守人。」

と、改まって云った。

「ほう！ 武尊……守人……なるほど、武尊守人、か……」

「で、御身の方は？」

「縄、たち。」

「流派は？」

「いちち流よ。はゝゝゝ……」

大口を開いて笑いながら、

「上州、どうやら、俺ア、妙にお前が好きんなんて来た。尤も俺に好かれちゃ迷惑だろうが。仲直り、仲直り。それとも、たつて、やるか？」

守人も、相手が評判ほどの悪人ではないように思えて来て、幾分気安げに、

「其方から売って来た喧嘩だ。良いように……本名も、いずれとつくり伺うことにしよう。だが、時が経ち過ぎる。兎に角、番所への届けを先にして……」

と云うのを、縄いたちは押止めながら、

「まア、待てってことよ。上州。お前の縄は筋ア減法いゝが、場数を踏んでいねえ。いざ、って時の実戦法をこゝで見せてやろうじゃ無えか。どうだ、聞えるか？」

「何が？」

「登音。」

なる程、その時、大地の闇を蹴って乱れた登音があわたゞしく此方へ近附きつゝあるのが聞きとれた。

「犬共、この腐肉を探しているのだな。」

縄いたちは足許の死体を見下ろしながら事もなげに云った。そして、闇の向うを透かして見ながら、

「ほう、大分来るな。久方振に一汗かくか。」

だらりと垂れさがった衣服の裾を端折って、両手を内懐に太たくのっそり立ちはだかった鼻先へ、だゝゝゝ……と雪崩れ寄って来た浪人体の七八人が、地上に横わっている死体を蹴返して、

「此奴、こゝに……」

「探して見ろ！」と一人が。

かゞみ込んだ二三人が、死体の衣類中をなで探っていたが、

「ない。」

「左もあろう。」と、もう一人が、仁王立ちになっている縄いたちの顔を睨み附けながら、

「やい、縄いたち！」と叱咤した。

四

殺氣立った異様の浪人者七八人を前に置いて、縄いたちは懐手のまゝせゝら笑った。

「ほう、俺の名を知っている。して見ると、手前達、もぐりでも無えようだな。」

「黙れ、いちち！」

相手の一人が大刀の束を叩きながら怒声を張り揚げた。

「貴様、この死人から、何か奪ったであらう？」

「奪れば、どうなる？」

「出せッ！」

「出さなけりや、どうなる？」

「小頼なッ！」

男は、拳でどんと胸を叩いて、

「殺れッ！」と叫んだ。

一斉に抜き放たれた白刃が、切尖を一線に揃えて、たゝゝゝ……と寄ってくるのを、

「いよゝ、来るか。」

と、守人の方へ意味あり氣にちよつと微笑しながら、

「上州、始めるぜ。よく見て置きな。」

白刃群は呼吸を揃えて、

「縄がうるさい。引包んで、一気に……」

と、一人が叫んだ、次の瞬間、殺氣が闇にみなぎって、白刃

宙に踊るよと見た途端、縄^いたちの袖口から飛び出した縄が稲妻の如く月光に閃めいて、じいんと鋼鉄の震動する音と一緒に三人が、剣をはねられて、反動で後へ反りかえって行った。「出鼻を叩く。此奴が第一の良策だ。武尊右衛門創むところの縄叩きの一手よ。で、その次ア……」

そう云いながら、縄^いたち、体を伏せて、たゞと地を蹴るや、自刃の間をくゞって向う側へ駈け抜けた。さゞと左右に別れた浪人達の中から、一人が、片手で顔を抑えて、よろ／＼と傍らの人家の軒下までよろめいて行つたと思ふと、そのまゝ蹲まつてしまつて、苦しげに呻き声を漏らした。縄^いたちは、「これが、飛燕の奇手。その次は……」と嘯^{うそ}いて、

「上州、蛇の目傘の正攻法を見せようか。」

と云いも終らず、正面から片手殴りに切り込んで来た一人を左にはずして置いて、縄^いを右手から繰り出すや、そのまゝ、頭上に風車のように円を描いて打振りはじめた。

苛^いった一人が、足を掲^あげて来たのを左手の縄の他端で軽くはねて置いて、右手の縄の円運動を続けたまゝ縦横に飛ばしながら、崩れかゝった白刃の間を悠然と守人の側まで戻ってくるのと、する／＼と縄を懷へ手繰り込んで、懐手のまゝ、

「一寸、一休みするかな。」

と、人を喰った調子でにや／＼しながら云つた。

怒気を煽られた浪人群は、陣形を立直して、しかし多分の戒心を払いながら、再び、じり／＼詰め寄つて来た。

「懲りねえな。よし！」

と肩をゆすつた縄^いたちが、その時、ふと、何を見たのか、「いけねえ。」と守人の方へ囁いた。

守人が、いわれて、見ると、浪人達には背後で気がつかなくなったのであらう、誰か番所へ注進に行つたものがあると思へ

て、御用提灯が此方へ向つて一散に飛んで来るのだ。「うるせえ事になりヤアがった。いけねえ。逃^にらからうぜ。こ^う来な。上州。」

いうや否や、縄^いたち、一目散に駈け出した。思わず、反射的にその跡をついて走り出した守人。

「やるなッ！」と速二無二追いつがってくる浪人群。更にそれを追ってくる御用提灯の数。

山 彦

一

縄^いたちの声に曳き摺られるようにして、反射的に走り出した守人は、走り出してから、

——これはいかぬ——と、思った。

——縄^いたちと一緒に逃げ出しては、同類と見られても仕方あるまい。殺気立っている背後の浪人群が、今更弁明に耳を貸す筈もなし、まづいことに……

と悔いて見たが、もう遅かった。

辻から辻へ。路地から路地へ。

一団の黒い旋風となつて飛んで行く。追う群、追われる二人。

「おい、上州。」

二間ほど先を走って行く縄^いたちが、首だけ振り向けて、大して息も切らせず、

「この先の塀で、稲子^{いなこ}跳びだ。俺について、良いか……」

と囁鳴った。

路地を走り抜けて、また路地へ。

そのどん詰りに、高く忍び返しを廻らした黒板塀があった。其処まで来ると、縄いたち、つと体を沈めて、右手からするッと投げた縄。

その一端が塀の向側へ絡んだ瞬間、その縄の張力と、足の跳躍力とを利用して、軽々と塀を躍り越えてしまった。武尊流五跳の一つ、稲子跳びがそれだった。

後につづいていた守人はそれを見て、

——夜盗の如く、まさか、塀を乗り越えて……

と躊躇して、両側を見廻したが、生憎と、抜道一つない袋路地だった。

——止むを得ぬ——と、決意した時は、血に渴した怒声が耳後に迫って——。

必死に投げた縄が塀先に絡むと、

——しめッ！——と手繰って、跳上った途端、

「喰らえッ！」

と云う裂帛の怒声と共に、衣類の裾に触れる剣端の重味を感じて、ぐらりとしたが、危うく平衡を保った守人、塀先を越えた瞬間、

「しまった！」

と思わず叫んだのは、切り裂かれた着物の端が忍び返しの先に引つかゝったからで、不運にも、真逆様に落ちながら石燈籠の屋根へ咄壁についた左手が、吾のためにつるとこたえて、横様に大地へ。

——不覚。——と唇を噛んだまゝ、五体に感じた激痛を最後に、全く気を失ってしまったのだった。

がががが……。

がががが……。

と何か音がしている。

重苦しい、鬱陶しい濁音が、遠くで微かに、微かに。

がががが……。

がががが……。

微かに、それから段々近く、近くなって、がん／＼と耳の辺りで鳴り出すと、胸苦しさ、疼痛が、一杯に拡がって。

——不快。——という最初の、微かな意識と一緒に、人声らしい気配と、甘い香気を感じて、

——はて？——

という疑問が頭脳をかすめた途端、駒形の出来事、縄いたち、浪人群、逃走、稲子跳び、墜落——と、一時に記憶が甦って来て、はっきりした疼痛と一緒に、見開いた眼に、赤い灯影と白い美しい女性の顔が。

——妹の梢？——と、思ったが、

——否、違う。——

守人はむっくり起き上ろうとした。

「あれ、お起きになつては……」

と軽く押止めたのは、一目で武家の娘と知れる気品の高い麗人だった。その側から、乳母と見える年配の婦人が、

「ほんに、ようございました。早くお気がつきなさいまして……」

と顔を覗き込みながら、守人の額にのせてあった濡れ手拭を、絞らたての新しいのと交代えて、

「お痛みは、いかゞでございます？」

と労わるように訊ねた。守人は、その時はじめて、立派な部屋の中に、綺麗な夜具にくるまって寝ているのに気がついた。

「や、これは！」

と、今度は無理に起き上って、ぐら／＼と眩い^{めま}がするのを片手で額を抑えながら、する／＼と畳際まで退^すって、
「何も弁えて居りませぬが、何やら、厚いお世話に預りました様子……」

と手をつくのを、乳母は無理にも蒲団の所へ押しやって、
「そのように、御無理なすってはいけません。さア、もう少しお寝^ねになつて……」

「ほんに、もそつと、御気分をよくなるまで……」
と、娘も真剣になつて勧めるのだった。

「御厚意は真に……ですが、拙者は一体？」

「先程、何やら物音に、爺が起きて見ますと、庭の燈籠の側に、貴方様が……」

「なるほど、それで合点が参りました。」

守人は、醜態な——と顔を染めながら、

「実は、その事につきまして……」

と、弁解しようとするのを、娘は押しとめるように、

「いえ／＼、お話でもおあり遊ばすようなら、明朝にもお伺い申しますから、と、兄がよく／＼申して居りましたから……」

「が、然し……」

「いえ、どうか御安心遊ばして……御ゆるりと、どうぞ。」

側から乳母も、

「お嬢様も仰有います通り、明朝、旦那様がお目にかゝりたいと申して居られましたから、それまでどうぞ……実は……」
と真顔になつて。

「事のいきさつは良くは存じませぬが、まだこの家の周囲をうろろろしている男の影も見えろとやら、それに、お身体の方もまだお痛みの御様子ですし……」

「御厚意重々……」

と、手をついたまゝ暫らく考えて、

——主人に挨拶も述べず振り切つても帰れず、それに、まだ目まいもするし——

「では、御厚意に甘えて……」

「そうなさりませ、そうなさりませ。」

乳母が蒲団を直している暇に、娘は湯呑茶碗を盆に乗せて差しながら、

「如何でございます？ お薬湯を……」

渴を覚えていたので、

——有難く——と受取つて、一息に吞干した。

乳母は煙草盆に蚊遣りをくべ直して、

「それではお寝みなされませ。御用の節はお手をお叩きくださいば……」

と一礼して立上つたが、気がついて、

「お嬢様。」と声をかけた。去り兼ねた風情だった娘は、はッとしたように、

「お寝み遊ばせ。」と小さく云つて、染めた顔を見られまいとするように、小走りに部屋から出て行つた。

二

駒形で突然足許へ倒れて来た覆面の男、将棋の駒、縄いたちという覆面醜貌の怪人物、殺気だった浪人群、御用提灯、稲子跳びの失敗、悶絶、それから覚醒、麗人——とその夜の出来事を次から次へと想い巡らしている内に、疲労のためか、薬湯の効き目でか、間もなく守人は深い眠りに落ちてしまった。

そして翌朝、眼が覚めた時には障子に朝日の影が快く映つていた。

——寝過ぎたかな。——と苦笑して帯を締め直しているところへ、

「お目覚めでございますか。」と乳母が這入って来た。

「昨夜は厚いお世話を……」

「いえ、お礼では痛み入ります。あの、お召物のお裾が大変破れて居ります御様子、どうぞこれにお着かえなさいませ。」

と、一重ねの着物を差出すので、

「そう迄して頂いては……」と断ったのだが、

「でも、お嬢様の折角の思召しでござりますから……」

そういう言葉に断り切れない調子があったので、守人は恐縮しながら、その羽二重に手を通した。

縁先に手水の用意があつて、それが済むと、

「此方へ。」と庭に面した書齋らしい部屋へ案内された。

机に向つて熱心に読書していた書齋の主は、守人の這入つて来た気配に、机を離れて向き直つた。三十四五に見える、年齢の割に苦勞人らしい立派な人物。

「昨夜はお屋敷内をお騒がせ致した罪をお咎めもなく、剩え、お手厚い御介抱やらお世話やら、心から幾重にもお礼申し上げます。」

守人が改まって挨拶するのを、軽く押止めるように、

「些細な事を、却つて痛み入ります。」

そう静かに言いながら、好意の籠つた微笑を以て守人を見遣つた。

「私事、上州藤原村郷士武尊^{はたかむね}守人と申す者、只今は橋場道林寺^{わたがし}に寓居致して居ります。お見識置ききの程を。」

「武尊殿——と云わるゝか……申し遅れたが、手前は、南町奉行所与力職、赤地源太郎と申します。以後、御昵懇に。」

一とおろ、挨拶が済んでから、守人は一膝進めて、

「実は、昨夜、駒形で……」

と、一伍一什^{いちごし}をかいつまんで物語つた。

「それで、事の様子が呑込め申した。時ならぬ物音に下男が庭へ出て見ると、石燈籠の側に御身が悶絶して居られた。仔細ありげに存じ、丁寧に御介抱いたせと申しつけて置いた次第でござるが、大したお怪我もなかつた御様子で、何より重畳。」

「お蔭様で。」

「ところで、武尊殿。」

源太郎は、守人の顔をじつと見ながら、真面目な調子で、

「御身の、昨夜の出来事、誰にも口外無用ですぞ。」

「は？」

「殊に、御身が手にせられた駒の事を……。出来るかな、沈黙が……話すと、御身の、命が危い。」

「と、申しますのは？」

「異なことを申すようだが、あの将棋の駒には、呪いの影がつきまとつて居る。あの駒の動くところ、必ず血の雨が降らずに居らぬのだ。理由はあるが、それ以上お話は出来ぬ。」

「は……」

「穏やかな江戸の町に……そんな馬鹿な事が、とお笑いになるかも知れぬが、身共の眼には、その黒い影が、はつきり見えるのです。」

源太郎の奇怪な言葉に、守人の好奇心がむら／＼と頭を上げはじめた。源太郎は尚も言葉をついで、

「身共には御身が満更の他人とも思えぬで、御注意いたすのだが、その将棋の駒は、お手放しになられた方が無難ですぞ。」

「は。もとより拾得致しました物、まして、駒一つ、惜しいはずもございませぬが……」

「手放しにくいかな？」

「……………」

先刻まで、いささかの興味もなかった将棋の駒に、源太郎の話を聞いてからと云うもの、守人は強い魅惑を感じ出したのだった。高が、駒一枚、それにこんな執着を覚えるなど云うのが、既にその駒の持つ魔力——守人の立ちいたるべき運命だったのかも知れない。

「この源太郎が、与力の職権を以てお渡しを迫ったら？」

「いや、決して、惜がるではございませぬが……」

と、一寸考えて、

「お役に立てば真に幸福、必ずお手許まで差上げますが、暫く御猶予が願いたいと存じます。それも、一日、今日、夕刻までには必ずお届け致しますが……一寸、存じよりもあり。」

「はは……」

源太郎はからびた笑い声を低くたて、

「どうやら、御身も、山彦に魅入られたようだの。」

「は？ 山彦？」

と、守人が反問したのを、源太郎、聞えぬ態で、

「夕刻、と云われたな。お待ち申そう。だが、くれぐれも御注意なされよ。」

「お言葉、肝にとめまして……」

丁度、その時、廊下に女性の声があって、

「お兄様。」

「楓か？」

「はい。」

「這入れ。」

障子が開いて、見覚えのある昨夜の娘が這入って来た。髪をあげ、化粧を整えたその姿は、一層楚々と、あでやかに。

「武尊殿、妹の楓です。」

源太郎の紹介までもなく、守人は向き直って、

「昨夜はお手厚い御介抱にあずかりまして……」

と慇懃に一礼するのを、楓はまともに視線も向けられず、赧くなった面を畳に伏せて、

「行届きませぬで。」と口の内で言うのを、源太郎が、

「いつもおき、んな楓が、今日は馬鹿に神妙な。」と笑って、

「で、何か用か？」

「は、芝の平次殿が至急お目にかゝりたいとか申して参って居ります。」

「平次が？ よし、直ぐ会おう。」

守人は帰る潮時を見出した。

「では、手前、失礼させて頂きます。何れ、お礼には改めまして。」

「おう、お帰りなさるか、礼には及ばぬが、是非、遊びに参って下され。楓、お送りいたせ。」

楓に送られて門を出た守人は、右見ても、左見ても、知人の少いこの江戸で、偶然から識った赤地源太郎一家の暖かさをしみじみと心に思い返しなが、橋場の寓居へと急いで歩いて行った。楓が、門にもたれたまゝ、何時までも何時までも、じつと自分の後姿を見送っているのに気もつかず——

三

当時、江戸南町奉行松野河内守配下与力、赤地源太郎といえは利かけ者として通っていた。殊に、刑事問題に関する手腕にかけては南町奉行所随一と謳われ、目明しを巧妙に駆使して、江戸内外の出来事にして知らざるはなしという有様だったから、赤地の地獄耳と呼んで舌を巻かれていた。

利れる——という一面に、反対者の出来るのは仕方がないこ